Department of

INTER-MEDIA ART

TOKYO UNIVERSITY OF THE ARTS

東京藝術大学 美術学部 先端芸術表現科 / 大学院美術研究科 先端芸術表現専攻

Department of Inter-Media Art, Faculty of Fine Arts / Department of Inter-Media Art, Graduate School of Fine Arts

2015

先端芸術表現科の理念と目標

先端芸術表現科が、世界に先がけ美術学部に創立以来、17年の歳月が流れました。広くメディアを横断する現代の芸術表現と人材育成をめざし、2005年には、大学院博士後期課程の入学者を迎え、修士、博士までの一貫した教育体制が整いました。その間、「取手アートプロジェクト」をはじめ、地域とグローバル社会を結ぶ実践に、精力的に取り組んでまいりました。近年では、「国際フォーラム：現代アートにおける社会実践」など新進芸術家育成事業が取手で展開されました。

本学科の卒業生は多岐にわたっています。表現者、アクティビストとして活躍する人材はもちろんですが、アートと社会を結ぶ仕事に就く者、また海外で活躍する者を輩出しています。

私たちは「もっとも先鋭的な学科」であり続けたい。また、革新とともに伝統の継承を問う存在でありたい。この航海に乗り込まんとする意欲にあふれた新しいメンバーを迎え入れたいと心から願っています。

Department of Inter-media Art – Goals and Principles

The Department of Inter-media Art was established as an art department on the global leading edge seventeen years ago.
The department welcomed its first doctoral students in 2005, making it a complete educational department including Master's and Doctoral programs. The department works enthusiastically to connect rural areas and the broader global community through activities such as the Toride Art Project. In recent years, the International Forum: Social Practice in Contemporary Art and other emerging artist development projects were held in Toride.
Graduates of the department have gone on to a diverse range of occupations. Naturally, many have become performers and activists, but others have gone on to play active roles in connecting art and society, while more and more work overseas.
We aim to continue being the "most cutting-edge department".
We also plan to be a presence that questions the continuation of tradition and innovation. New members full of willingness to board this voyage are sincerely welcomed.

教員紹介 FACULTY MEMBERS

伊藤俊治 Toshiharu Ito
教授（美術史家・美術評論家）
人間の能力を細かく分化させてゆくのではなく、分化する能力を再び統合し、全体性を愛する心を見失わないこと、専門化や細分化が有効なのは、それらを統合する何かがある時だけであり、創造性は全体性を内包することから自然に生まれてくること、そのことを体感する場が先端なのだと思います。

—

八谷和彦 Kazuhiko Hachiya
准教授（メディアアーティスト）
踊ってもいいし、音でもいいし、文章を書いても、写真でも映像でもいい。
……という風に「何を作ってもいい」と言われると、意外と人は悩んでしまうものかも。学生を見ると、たまにそういうことも感じます。けど、そういう風に真剣に悩む時間を人生の中で持つのは、実はとても大事で貴重、と思っているのです。

日比野克彦 Katsuhiko Hibino
教授（アーティスト）
アートのアートならではのところって、正しい答えがないところのような気がします。その時の自分の考え、その時の自分の表現がその時の自分にとってのとりあえずの答え。でも、それは正解じゃない。だからいつも次のことを考えている。芸大の長い歴史の中で、学生も教員もみんな次の表現のことを考え続けて来ている。そんな中で生まれてきたのがこの科です。先端芸術表現科の学生が考えていくことが次の芸大を次のアートを創ることになっていく。

—

小沢 剛 Tsuyoshi Ozawa
准教授（美術家）
例えばキリの先っぽが先端であるためには、その後ろに伸びる鋼鉄（スチール）は美術の歴史、あるいは人間の想像力だ。更にその鋼鉄を支える丸く優しい木製の柄は、地球の回転か宇宙のゆらぎだ。それらの力を借りて、キリの先っぽは時代に風穴を開けてゆくのだろう。やがてはキリの先っぽは摩耗してくる。キリの先っぽは常に鋭利で無くてはならない。

たほりつこ Ritsuko Taho
教授（パブリックアーティスト）
現代アートの実践、歴史、評論、企画運営といった幅広い領域に関わる多彩な教員が集まり、各自のテーマや方法による教育研究をおこなっています。内容を深化させ、決断と実行によって、制度とは異なる思考と実験の地平が拓かれています。その絶妙なバランス、自在に進化する創造性を内包する、稀にみる魅力的な学科なのです。

—

佐藤時啓 Tokihiro Sato
教授（美術家・写真家）
先端創設時から参画した。本学彫刻科出身者として当初は戸惑うことも多かった。しかし今は確実に言える。「なぜそのメディウムで表現するのか?」ということが対照化され、社会との関係性、そして芸術の置かれた立場などについて客観視できる場所。作ることと考えることの両輪を実現し実践する現場。先端はそんな場所なのだ。

長谷部 浩 Hiroshi Hasebe
教授（演劇評論家）
私は、本来の専攻が近現代演出史である。そのため美術系パフォーマンスに限定しない幅広い身体表現を学生とともに探求してきた。また、身体に限らずすべての表現活動は、批評の言葉を鍛えることによって足腰が強くなると考えている。身体や言語に関心のある学生にぜひ志望してもらいたい。

—

小谷元彦 Motohiko Odani
准教授（美術家・彫刻家）
今日の表現者の前には、ペインティングや彫刻など従来の手段だけではなく、様々な表現手段が拡がっている。アーティストは社会の趨勢や異分野、歴史から刺激を受け、表現のコンセプトを掴んでいく。そして領域横断の方法は、表現手段だけに留まらず、見せる場や波及効果にまで至る。先端はそんな方法論が見つけやすい場だと思う。

飯田志保子 Shihoko Iida
准教授（キュレーター）
現代を生きるアートの実践者は、社会常識や規範を認識し、その一員としての自覚を持って生きていくことが求められます。ですが、アーティストは盲目的にただ社会に居るのではなく、何がその「常識」や「規範」を形成しているのか、社会が何によって構成されているかを、作品をとおして批評的に問いかける存在であって欲しいと思います。「先端表現」の定義は不動ではありません。アーティストが外に広がる世界に目を向け、変わることを恐れず、安易に様式化に陥ることなく、本質の探究者である限り、この科にはアートと社会を切り結んでいく大きな可能性があると思います。

鈴木理策 Risaku Suzuki
准教授（美術家・写真家）
ひとつの表現形式を学ぶことは、その技術を知り、高い表現性を目指してゆくものだと思います。ただ、自分の表現したいものがひとつの形式に収まるとは限りません。変化し続ける世界の中で何を感じ、どう表現するのか。先端はそうした問いに直面する場です。自身の表現を構築するための多様な刺激に満ちていると思います。

—

古川 聖 Kiyoshi Furukawa
教授（音楽家・作曲家）
先端芸術表現科でいう所の領域横断性とはアートの枠内での移動や組み合わせではなく、アートとアートではないものの間を行き来しつつ、アートの外側の様々な場所に（たとえそれが困難な事であるにしろ）点を打ち続け、そのメタポジションから見えてくる、アート各領域の関係性を探るような、絶え間の無い動きのようなものだと思う。

Toshiharu Ito　Kazuhiko Hachiya　Katsuhiko Hibino　Tsuyoshi Ozawa　Ritsuko Taho　Tokihiro Sato　Hiroshi Hasebe　Motohiko Odani　Shihoko Iida　Risaku Suzuki　Kiyoshi Furukawa

最後の手段（有坂亜由夢）《茶の奥吹く街》2015年

アルカディリ・モニラ《MUHAWWIL（TRANSFORMER）》2014年

及川潤耶《Voice Landscape project》2009年

大山エンリコイサム《FFIGURATI #88》2013–2014年
©2014 Ōyama Enrico Isamu Letter　撮影：Atelier Mole

卒業生紹介 GRADUATES

有坂亜由夢 Ayumu Arisaka
映像作家。1985年千葉県生まれ。2012年東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻修士課程修了。ビデオチーム「最後の手段」結成。アニメーション作品、MV、グラフィックなどを国内外で発表。2014年「メディア芸術祭」エンターテイメント部門新人賞など受賞。「TOKYO ANIMA 2015」国立新美術館、「クリトビオシス：世界の種」（インドネシア）等に出品。National institute of Design（インド）にてワークショップなど活動中。
http://www.saigono.info/

—

アルカディリ・モニラ Monira Al Qadiri
クウエート国籍のアーティスト。1983年セネガル生まれ。2010年東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現領域博士後期課程修了。中東を中心に「悲しみの美意識」やジェンダー問題を取り上げ、宗教と文化的アイデンティティーが失われていく事を作品のモチーフにしている。2013年から「GCC」というアーティスト集団のメンバーになり、翌年ニューヨークのMOMA PS1で個展を行った。現在ベイルートを拠点としながら、世界各国で展示やレクチャーを行う。
http://www.moniraalqadiri.com/

—

石川直樹 Naoki Ishikawa
写真家。1977年東京都生まれ。東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現領域博士後期課程修了。人類学、民俗学などの領域に関心をもち、行為の経験としての移動、旅などをテーマに作品を発表し続けている。2008年、写真集『NEWDIMENSION』（赤々舎）、『POLAR』（リトルモア）により、日本写真協会新人賞、講談社出版文化賞。2009年、写真集『Mt. Fuji』（リトルモア）、『VERNACULAR』（赤々舎）を含む近年の活動によって東川賞新人作家賞。2011年、『CORONA』（青土社）にて第30回土門拳賞を受賞。写真集『LHOTSE』、『Qomolangma』をはじめヒマラヤ五部作を刊行中。
http://www.straightree.com/

岩田草平 Sohei Iwata
アーティスト。1979年和歌山県生まれ。2008年東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻修士課程修了。文化庁在外研修生としてインドへ渡る。インド先住民族のサンタルと《アディバシの給水塔》を制作する。ポーラ美術振興財団、吉野石膏美術振興財団などの助成を受ける。主な活動に「記憶のイメージ/イメージの記憶」BankART Studio NYK（神奈川）、「Trans Arts Tokyo 2014」旧東京電機大学（東京）、「中房総国際芸術祭いちはらアート×ミックス」市原（千葉）、「六本木クロッシング2013」森美術館（東京）、「瀬戸内国際芸術祭2013」本島（香川）、「土のつわもの」国際交流基金（ニューデリー：インド）。サンタルの農村で2012年に民族とアーティストをつなぐアート集団Prominorityを結成する。
http://prominority.com/　http://sohei-iwata.jp/

—

及川潤耶 Junya Oikawa
作曲家、サウンド・アーティスト。1983年仙台市出身、ドイツ在住。2011年東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻修士課程修了。2011年秋より、ドイツ公営メディア芸術センター「ZKM」の客員芸術家として渡独。生命とテクノロジー、環境をテーマにした音の展示「Voice Landscape」シリーズ（2009年〜）や、電子音響のコンサートを中心に海外を拠点に活動している。
http://www.junya-oikawa.com/

—

大山エンリコイサム Ōyama Enrico Isamu Letter
美術家。1983年イタリア人の父と日本人の母のもと東京に生まれる。2009年東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻修士課程修了。グラフィティ文化の視覚表現を翻案したモチーフ「クイック・ターン・ストラクチャー（Quick Turn Structure）」をベースに壁画やペインティング作品を発表し、注目を集める。また、コム デ ギャルソンやシュウ ウエムラとのコラボレーション、著書『アゲインスト・リテラシー ―グラフィティ文化論』（LIXIL出版）の刊行など広く活動している。アジアン・カルチュラル・カウンシル2011年度グランティ（ニューヨーク滞在）。現在ニューヨーク在住。
http://www.enricoletter.net/

—

片山真理 Mari Katayama
美術家。埼玉県生まれ、群馬県育ち。2012年東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻修士課程修了。受賞に、2005年「群馬青年ビエンナーレ奨励賞」群馬県立近代美術館、2012年「アートアワードトーキョー丸ノ内グランプリ」、2015年「3331 Art Fair 2015 和多利浩一賞、吉本光宏賞」。展覧会に、2010年「identity, body it. ―curated by Takashi Azumaya―」nca（東京）、2013年「あいちトリエンナーレ2013」（愛知）、2014年個展「you're mine」トラウマリス（東京）など。http://shell-kashime.com/

—

今日マチ子 Machiko Kyo
漫画家。東京都生まれ。東京藝術大学美術学部先端芸術表現科卒業。2004年からほぼ毎日綴った1ページ漫画ブログ「今日マチ子のセンネン画報」が書籍化されて注目を浴びる。2005年「ほぼ日マンガ大賞」入賞。2006年・2007年・2010年・2013年文化庁メディア芸術祭「審査委員会推薦作品」に選出。著作に『みかこさん』『ぼくのおひめさま』（やくしまるえつこ朗読CD付絵本）の他、近刊に『いちご戦争』『5つ数えれば君の夢』『ニンフ』『吉野北高校図書委員会』等多数。戦争を描いた『cocoon』は劇団「マームとジプシー」により2013年に舞台化され、2015年には再演が決定。2014年には『mina-mo-no-gram』『アノネ、』『みつあみの神様』『U』が評価され第18回手塚治虫文化賞新生賞を受賞。
http://juicyfruit.exblog.jp/　twitter: @machikomemo

—

小町谷 圭 Kei Komachiya
メディア・アーティスト。札幌大谷大学芸術学部美術学科専任講師。東京生まれ。東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻修士課程修了。絵画制作を経て電子メディアを使用した作品

石川直樹《8848》2011年 ©Naoki ISHIKAWA

岩田草平《アディバシの給水塔》2012年 ©2013 Sohei Iwata

片山真理《ballet》2013年

今日マチ子『みつあみの神様』2013年

小町谷 圭《Dissolution》2013年

下平千夏《smell the frontier》2014年

ニコラ・ビュフ《ポリフィーロの夢》2014年

を発表。主な活動に「演算する絵画」、「Materia ex machina ―機械仕掛けの絵肌―」ICC（東京）、「デジタル・オイル・ペインティング展」東京藝術大学大学美術館、電波ジャックインスタレーション「Endless Tv」などがある。また新しい職業を提案する「project the projectors」展、影響を与えた図書についての表現者のインタビューを蔵書する「Lib-LIVE!」ICC（東京）、東京と福島の間にある電力の問題をテーマにした「東京芸術発電所」などプロジェクトも行う。現在、札幌国際芸術祭2014の事業や文化庁メディア芸術祭の選考委員なども務めている。http://komachiya.net/

―

下平千夏 Chinatsu Shimodaira

美術家。1983年長野県生まれ。2010年東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻修士課程修了。事物が持つ用途や意味を過大評価し、より純化した存在に昇華させた空間作品を発表している。主な個展に、2010年「implosion point」INAXギャラリー2（東京）、2014年「smell the frontier」Taipei Artist Village（台北）、2015年「エーテル」犬島家プロジェクト（岡山）。主なグループ展に、2013年「六甲ミーツ・アート」（兵庫）、2012年「Tokyo Midtown Art Award」（東京）などがある。http://www.shimodairachinatsu.com/

―

ニコラ・ビュフ Nicolas Buffe

アーティスト。1978年フランス・パリ生まれ。2007年以降東京に拠点を移す。2014年東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現領域博士後期課程修了。ヨーロッパの古典美術、日本や米国のサブカルチャーの混合をちりばめた作品で知られる。ファッション、オペラのアートディレクションなど、美術以外での活動も多い。2014年、原美術館にて個展「ポリフィーロの夢」が開催された。http://nicolasbuffe.com/

―

西尾美也 Yoshinari Nishio

美術家。1982年奈良県生まれ。2011年東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現領域博士後期課程修了。文化庁芸術家在外研修員（ケニア共和国ナイロビ）等を経て、現在、奈良県立大学地域創造学部専任講師。アフリカと日本をつなぐアートプロジェクトの企画・運営の他、ファッションブランドも手がける。六本木アートナイト2014ではテーマプロジェクトを手がけ、六本木ヒルズ、東京ミッドタウン、国立新美術館の三カ所に大規模なインスタレーションを発表した。http://yoshinarinishio.net/

―

潘 逸舟 Ishu Han

美術家。1987年中国上海生まれ。2012年東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻修士課程修了。現在東京在住。個人と共同体の関係性、社会としての身体についての作品を制作している。主な展覧会に2015年「In the wake」ボストン美術館（ボストン）、「Whose game is it?」RCA Gallery（ロンドン）、2014年「アジア・アナーキー・アライアンス」關渡美術館（台北）、2013年「Local Future」何香凝美術館（深圳）などがある。2014年アジアン・カルチュラル・カウンシル個人助成。

西尾美也《Kangaeru Street Fashionshow》2012年 撮影：James Muriuki

潘逸舟《海の形》2012年 ©京都芸術センター

藤田俊太郎《ミュージカルThe Beautiful Game》2014年 撮影：宮川舞子

宮永愛子《手紙》2013年 撮影：木奥恵三 ©MIYANAGA Aiko Courtesy Mizuma Art Gallery

藤田俊太郎 Shuntaro Fujita

演出家、演出助手。1980年秋田県出身。2005年東京藝術大学美術学部先端芸術表現科卒業。在学中の2004年、ニナガワ・スタジオに入る。俳優として活動したのち、2005年から2015年現在まで蜷川幸雄作品に演出助手として関わっている。主な活動に2011年《喜劇―幕・虹艶聖夜》新宿ゴールデン街劇場（東京）［作・演出］、2012年さいたまネクスト・シアター《ザ・ファクトリー2（話してくれ、雨のように……）》彩の国さいたま芸術劇場（埼玉）［演出］、2014年1月～2月《ミュージカルThe Beautiful Game》新国立劇場小劇場（東京）［演出］がある。2015年、第22回読売演劇大賞 杉村春子賞 優秀演出家賞受賞。絵本ロックバンド「虹艶（にじいろ）Bunny」としてライヴ活動展開中。http://www.shuntarofujita.com/

―

宮永愛子 Aiko Miyanaga

美術家。1974年京都府生まれ。2008年東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻修士課程修了。日用品をナフタリンでかたどったオブジェや、塩を使ったインスタレーションなど気配の痕跡を用いて時を視覚化する作品で注目を集める。2013年「日産アートアワード」初代グランプリ受賞。主な展覧会に2012年「宮永愛子：なかそら―空中空―」国立国際美術館（大阪）など。http://www.aiko-m.com/

―

目 Me

個々のクリエイティビティを特性化した、連携を重視するチーム型芸術活動。果てしなく不確かなこの世界の可能性を信じ、その先に鑑賞者の実感を引き寄せようとする作品を展開している。中心メンバーは、アーティストの荒神明香（2009年東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻修士課程修了）、ディレクターの南川憲二（2009年東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻修士課程修了）、制作統括の増井宏文の3名。主な活動に2013年「迷路のまち～変幻自在の路地空間～」瀬戸内国際芸術祭（香川）、2014年「たよりない現実この世界の在りか」資生堂ギャラリー（東京）、「おじさんの顔が空に浮かぶ日」宇都宮美術館館外プロジェクト（栃木）など。

―

毛利悠子 Yuko Mohri

美術家。1980年神奈川県生まれ。東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻修士課程修了。世界のさまざまな都市で見つけた日用品やジャンクをマシナリーとして再構成し、磁力や重力、光、温度といった目に見えない力を感じさせるインスタレーション作品を制作する。動くオブジェたちを展示環境に寄り添わせて配置し、ユーモラスでありながら緊張感を合わせもつ独自の空間を創出する。主な個展に2012年「サーカス」東京都現代美術館ブルームバーグ・パヴィリオン（東京）、主なグループ展に2012年「アノニマスライフ―名を明かさない生命」NTTインターコミュニケーション・センター［ICC］（東京）、2014年「札幌国際芸術祭」（北海道）、東京の駅構内の水漏れの対処現場のフィールドワーク「モレモレ東京」主宰。http://www.mohrizm.net/

目《おじさんの顔が空に浮かぶ日》2014年

毛利悠子《I/O ―ある作曲家の部屋》2014年 撮影：田中雄一郎 提供：横浜トリエンナーレ組織委員会

カリキュラム紹介 CURRICULUM GUIDE

FRESHMAN

[テーマ] 自己を知る　1年次

1年次では、様々な専門性に特化したスタッフによるスタジオでの演習授業を中心として、コンセプチュアル・アート、ドローイング、工作、音楽、映像、写真、身体表現、デザインなど、多種多様なメディアの特性を分野横断的に学びながら、表現活動に必要となる基礎的な知識や技術の習得を目指します。また、コンピュータの操作方法、芸術・美術史などの理論、リサーチやプレゼンテーションに必要な語学力も集中的に身につけることによって、基本的な読解力、柔軟な構想力、創造的な思考力を鍛えます。このように、実技と理論の両方をバランスよく学び、多彩な経験を積み重ねることによって、新たな表現を生み出すための能力や素養を身につけていきます。1年次の成果は、学生の主体的な企画・運営によって開催されるアートイベント「取手アートパス」で一般公開されます。

スタジオ演習「工作」

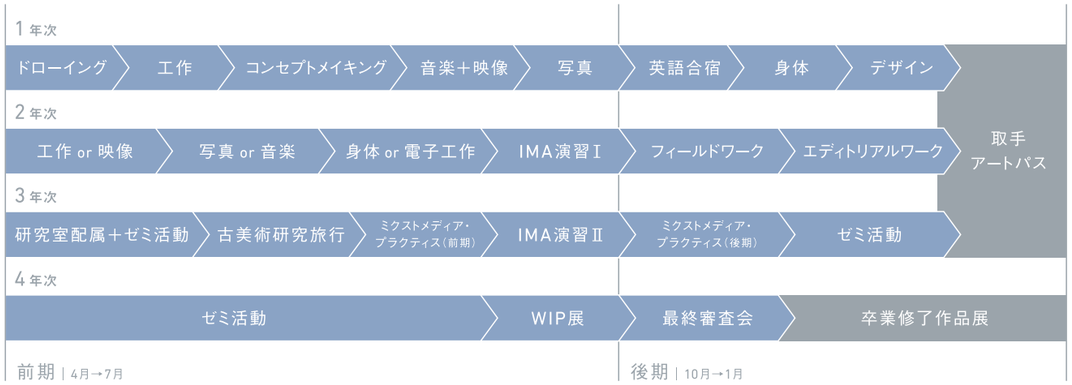
SOPHOMORE

[テーマ] 他者と外部を知る　2年次

前期の「スタジオ選択カリキュラム」では、1年次に学んだ知識や技術を応用し、多様なメディアを選択的・複合的に扱い、独自の表現方法を探求します。後期の「フィールドワーク」では、グループワークを基本として、学外の特定の地域をリサーチし、そこで得られた知識や情報に基づきながら、作品制作を行います。異なる個性や意見をもったメンバーが綿密なリサーチ、議論、交渉を行い、作品プランを実現させる一連のプロセスを学びます。「エディトリアルワーク」では、アートブックやポートフォリオの作成など、画像編集から製本に至るグラフィック・デザインを学び、過去の自分の活動をまとめて他者に伝えるための技術を習得します。さらに、1年次に経験した「取手アートパス」に再び参加し、作品展示に関する技術や知識を高めます。

スタジオ選択カリキュラム

美術学部先端芸術表現科 カリキュラムチャート | 2015年現在



JUNIOR

[テーマ] 関係をつくる　3年次

3年次では、教員別の「研究室」に所属し専門的な指導の下、1〜2年次で学んだスタジオ指導から自分の専門性を模索、思考し創作研究を行います。各研究室の内容は多岐に渡り、個人制作と研究室での活動との両輪をうまく利用して、さらに表現の幅を広げていくことが求められます。また、学年展示の「ミクストメディア・プラクティス（前期・後期）」で、展示を実践する経験を積み重ねます。2〜3年次に選択履修できる「IMA演習」は、外部から多彩な顔ぶれのゲストアーティストや講師を招いて学年横断的に行なう短期集中の演習授業で、表現に対する知見を広げていきます。「古美術研究旅行」では毎年テーマを設定し、熊野、奈良、京都を中心に日本の古美術を見学します。本科独自の行程により、日本の伝統文化・美術に対する造詣を深めます。

古美術研究旅行

SENIOR

[テーマ] 統合する　4年次

卒業制作を中心に、これまでの制作・研究活動を集大成していきます。所属研究室の教員の指導の下、領域横断的理論と実践を鍛えていきます。前期に「WIP（Work In Progress）展」、後期には「最終審査会」と段階を踏みながら進みます。「卒業修了作品展」に向けては個々の作品制作とともに、展覧会の企画運営にも学生が主体的に取り組んでいきます。

—

卒業修了作品展について

集大成の展示である「卒業修了作品展」は、毎年1月に東京都美術館で開催されます。先端芸術表現科ではイベント、広報デザイン、展示配置など、学生が主体となり展覧会を運営します。学生が制作するカタログは毎年趣向を凝らしたデザインと内容になっています。

卒業修了作品展

大学院美術研究科 先端芸術表現専攻

修士課程は少人数制による教育・研究環境となります。博士後期課程ではさらに個別の指導を行います。教員が学生に知識を伝達するのは、大学院教育の一面にすぎません。芸術が人々の意識を変革していくにあたって、教員と学生がパートナーシップを結び、その問題の所在を明らかにし、解決のための方策をともに考え創造していく場でありたいと願っています。狭隘な領域に分断すること無く、共通のゼミ（Art in Context）を設定し、美術に留まらない幅広い関連分野で活躍する多彩な人材が特別講義や演習などに参加し、さまざまな角度からアドバイスを与え、深く表現について学び、研究制作を進めます。

博士後期課程では、自らの専門分野における研究を行います。作品制作や研究発表によって新たな知見を得、それに基づきながら博士論文を執筆します。

国際交流・留学

先端芸術表現科ではグローバルな視野や国際的に活躍できる人材を育成するため、留学制度を設けています。アジア、欧米の大学に留学し、さまざまな文化に接することができます。海外の留学生の受け入れも行っており、さまざまな国の学生と交流しています。

—

留学生派遣・受入先（一部）［韓国］ソウル大学校美術大学、韓国芸術綜合学校［中国］中央美術学院、清華大学美術学院［イギリス］ロンドン芸術大学、ロイヤルアカデミースクール［オーストリア］ウィーン応用芸術大学［ドイツ］ワイマール・バウハウス大学、シュトゥットガルト美術大学［フランス］パリ国立高等美術学校、ナント芸術大学

右写真：ワイマール・バウハウス大学の授業風景

施設紹介 FACILITIES

1F｜ギャラリー
Gallery

天井高約8mのギャラリースペースになり、電動クレーンも併設しており、大型の作品も展示可能です。板張りの床なので、パフォーマンス等の発表にも使用しています。

101｜リハーサルルーム
Rehearsal Room

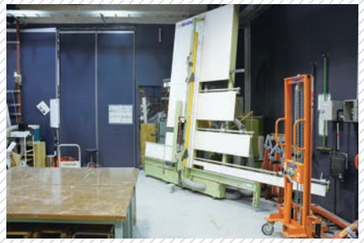
スタジオ講習「身体」等で使用するスタジオです。日頃はパフォーマンス、ダンス、演劇などの稽古にも利用しています。壁一面が鏡張りなので、練習の際にも活用できます。

103｜写真スタジオ
Photo Studio

電動バンクライト4機、ホリゾントなど設備されています。講習を受ければ、ストロボなど高度なスタジオ撮影が可能です。作品の記録撮影やポートレート撮影などに最適な環境です。

107｜写真演習室
Photo Laboratory

スタジオ講習「写真」等で使用するスタジオです。暗室を完備しており、現像からプリントまで銀塩写真の技法を体系的に学べます。他にもカラー暗室、大型引き伸ばし機も完備しています。

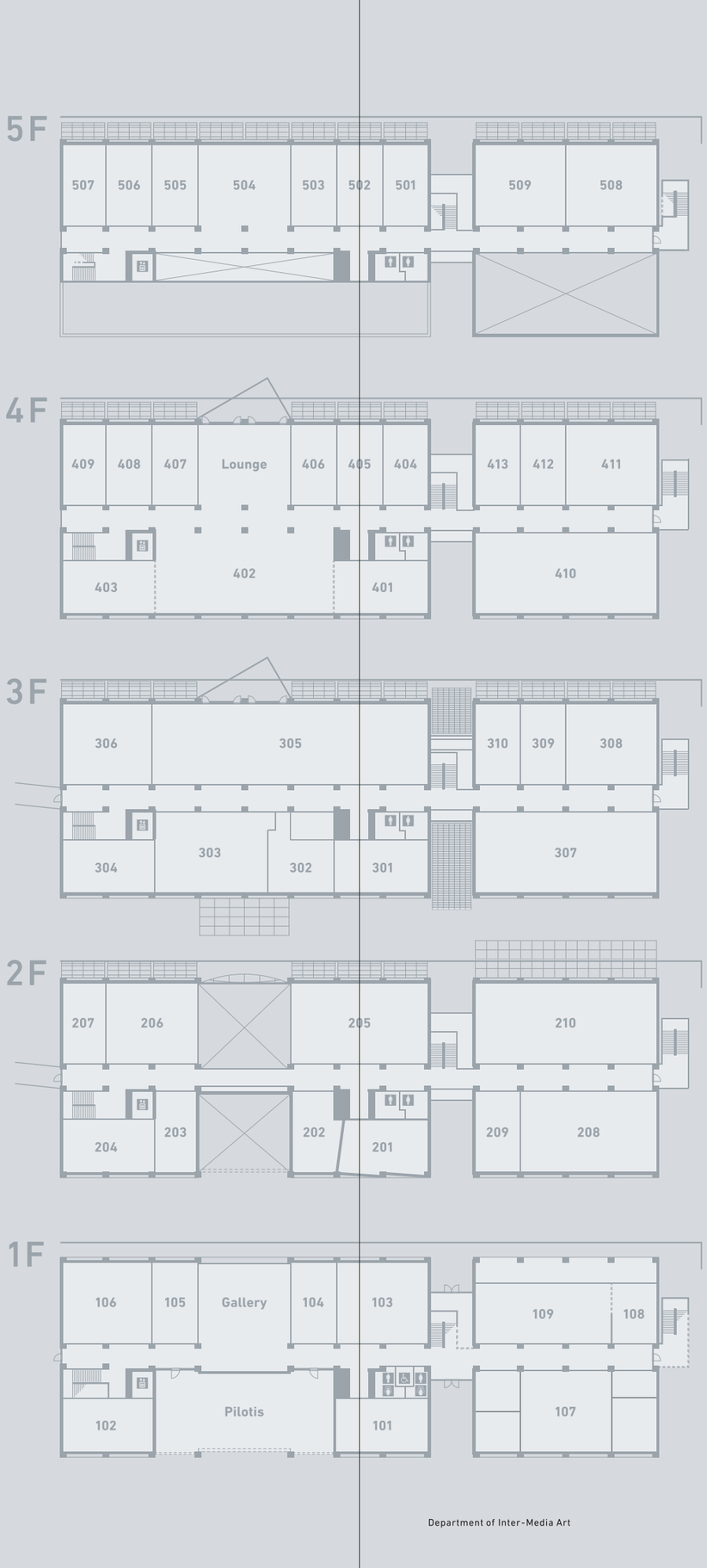


109｜工作室
Work Studio

スタジオ講習「工作」等で使用するスタジオです。講習を受けた学生は、設備を使用でき自由制作をすることができます。パネルソーや、溶接機など各種工作機械を設備しており、木工や金工、各種素材の制作が可能です。

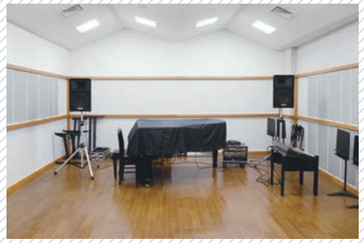
2F｜講義室
Lecture Room

第1講義室（107名）、第2講義室（63名）、第3講義室（36名）、第4講義室（123名）の4つの講義室があります。プロジェクターや音響の設備もあり、各種授業へ対応しています。



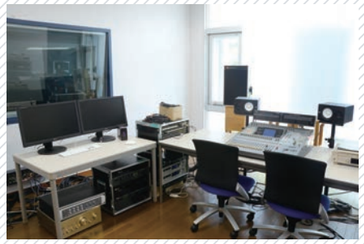
201｜音楽スタジオ
Recording Studio

スタジオ講習「音楽」等で使用するスタジオです。高い遮音性と最適な響きを確保しています。ゆとりある広い空間で音楽関係の授業で使用されるほかにも、生演奏や音声の録音、楽器のレッスンなど学生の多様な制作作業にも対応します。



202｜音楽プロジェクトルーム
Music Laboratory

音楽スタジオに防音ガラス窓を通して隣接するコントロールルームです。本格的なPA機器とデジタルレコーディング機材を完備し、録音のコントロールから編集作業、マスタリングまでを行なうことができます。



208｜コンピュータースタジオ
Computer Studio

30台のiMac、レーザープリンター、スキャナーを設備しており、映像、音楽、デザインなどの基礎的な授業を行います。授業外は常時開放しており、自由制作が可能です。

307｜映像編集スタジオ
Image Editing Studio

スタジオ講習「映像」等で使用するスタジオです。実技の映像授業では、映像の基礎となる撮影をレクチャーし、スタジオで編集作業を指導します。映像編集スタジオでは、Premiereなどを使用し、より専門的な編集作業を行います。

308｜メディアデザインスタジオ
Media Design Studio

スタジオ講習「デザイン」等で使用するスタジオです。Illustrator、Photoshop、InDesignなど、DTPアプリケーションを使用した制作を行うスタジオです。大判プリンター、カッティングプロッター、各種製本機材等も使用できます。

4F｜ラウンジ
Lounge

ロッカールームの隣にあり、自販機を併設しておりカフェスペースやミーティングの場としても利用できるラウンジです。メディア棟4階からは利根川の景色が眺められます。

Koichi Sato | INTERVIEW #1

佐藤浩一さん | 修士1年次在籍（2015年現在）

入学動機について

好奇心にまかせていたら辿り着きました。ある意味未知数の環境でしたが、とりあえず入らないで後悔するより入って後悔しようと考えていました。今のところまだ後悔していません…。

—

自分の活動について

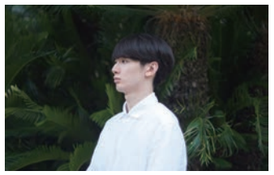
音響や映像などを用いて、インスタレーション作品を制作したり、ライブパフォーマンスをしたりしています。自分の作品制作と並行して、各地の芸能や祭礼のフィールドワークも行っています。自分自身が手を動かすだけでなく、表現にまつわる様々な人びとの営みを探ることも、自分の重要な活動の一部だと考えています。

—

受験生へのメッセージ

最近は天気がよく、散歩をする時間が増えました。ふらふらと歩くうちにいつの間にか日が暮れたりしますが、その日没というのが毎回とても新鮮なのです。明暗の移ろい、気配の増幅、目や耳や手足の感覚の変化。そういう変容が日々、私の内と外を貫くようなかたちで起きているのかと思うと、なんとも言えぬ気持ちになります。見えぬものを見、聴こえぬものを聴く能力がまだ自分にも残されているように思えてくるのです。このようなことが私の制作の出発点であるような気がします。重要なことは目や耳や手足が覚えています。それを忘れないようにしたいですね。

《Pavilion（fluid animals）》2014年 / サウンドインスタレーション



佐藤浩一 Koichi Sato
1990年東京都生まれ。2015年東京藝術大学美術学部先端芸術表現科卒業。現在、同科大学院修士課程在籍。音響や映像を用いてインスタレーションを制作している。主な活動に、「H.U.B」LIXIL Ginza（東京）、「記憶の森映像祭」アサヒアートスクエア（東京）、「SNS［showcase for new-media and sound］#1」落合soup（東京）などがある。

INTERVIEW #2 | Aoi Tagami

《東向きの部屋》2014年 / パフォーマンス

田上 碧さん | 学部4年次在籍（2015年現在）

入学動機について

芸術系の大学をいくつか探しましたが、表現の手法を限定することに違和感があったし欲張りでもあったので、ジャンルにとらわれず、表現することそのものから考えて、自分で実践することができそうなここに決めました。

—

自分の活動について

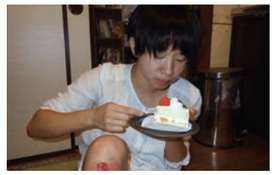
声に出した言葉が、音になってその場の空間と響き合い、想像力と一緒になって景色をつくる、というようなことを目指しています。作品を見る時には、自分の体があるし、場の音も、さっきまでとかこれからの時間も、他人の体もあります。それは、わたしにとって、毎日の制作や生活でも同じです。他人や社会の影響からは逃れられないし、同時に、全ては自分の今の精神状態や体から始めることしかできません。作品を見たり作ったりする特別な時間というのはわたしには多分なくて、それは極端に言えば、イヤホンで音楽を聴きながら電車に乗って景色を眺めているみたいな、日常と地続きの出来事なのだと思います。だからこそ、「秘密」が必要なのだと最近は考えています。

—

受験生へのメッセージ

見えているものを見て、しっかり呼吸をすることが、作品においても大事だと思います。吸ったらちゃんと吐いてまた吸う、の繰り返しで風を通す。わたしはまだ、良い呼吸の方法を探している途中ですが、正直に息をしている作品は、人の心に響くと信じています。

田上 碧 Aoi Tagami
1994年生まれ。2012年東京藝術大学美術学部先端芸術表現科入学。自身の声や言葉によるパフォーマンスや映像作品を制作している。主な活動に、「先端Ⅱ展」東京藝術大学大学会館（東京）、「3331千代田芸術祭2013」（東京）、「六本木アートナイト2015」（東京）、「吉原芸術大サービスG.W.～ゲイジュツ・ワッショイ～」（東京）などがある。



DEPARTMENT OF INTER-MEDIA ART

QUESTION & ANSWER

入学試験についてのQ&A

Q | 過去の試験問題を知りたいです。
A | 上野校地の教務課で閲覧できます。東京藝術大学ウェブサイトでも閲覧可能です。

Q | 入学試験の日程を知りたいです。
A | 学生募集要項を確認してください。

Q | 小論文は英語で書いても良いですか。
A | 小論文は英語で書いても構いません。

Q | 合格者作品の開示はしないのでしょうか。
A | 一部の作品は入試説明会で公開しています。

Q | 試験会場の雰囲気を知りたいです。
A | 試験会場は公開できません。公平に受験できるように照明や空調を整えています。

Q | 総合実技は何を意図した試験ですか。
A | 発想力、判断力、集中力、手を動かす力など「考えること」と「作ること」を総合的に試す試験です。

Q | 個人ファイル作成にあたり、芸術に関係のない活動履歴も含めた方がいいのでしょうか。
A | その活動履歴が先端芸術表現科で勉強したいことに重要な要素であるかを自分で判断してください。

キャンパスライフについてのQ&A

Q | 舞台や身体表現について勉強できますか。
A | 身体表現を専門にしているカリキュラムや研究室があります。

Q | アニメーションの企画や制作に興味があるが、映像の演習授業はありますか。
A | ビデオカメラの撮影方法、映像編集などの映像演習科目があります。アニメーションを制作している学生もいます。

Q | 授業中の学生たちの雰囲気はどうでしょうか。
A | 課題制作やアートパス取手の運営など、1年を通して一緒にいる時間が多いので団結力が強く、良い雰囲気で授業に取り組んでいます。

Q | 海外留学や海外展示する機会などがありますか。
A | 国際交流協定校が多数あり交換留学制度を設けています。ヨーロッパ、アジア、オセアニアなど世界の国々に行き学ぶ機会があります。

Q | 研究室の配属はどのように決まりますか。
A | 3年次の4月に研究室希望を提出してもらい、教員の話し合いで配属先を決めています。

Q | 卒業生の進路について知りたいです。
A | 作家、キュレーター、教育関係者、編集者、弁護士など、非常に幅広い活動を行っています。入学生は、過去の例や枠組みに捕われていない新しい活動を行う人も受入れています。

Q | 他の学科との関わりはありますか。
A | 学科を横断して行う授業やプロジェクトがあります。他の学科と一緒に学ぶことや活動する機会があります。

Q | 授業料免除・入学料免除の制度はどのようなものですか。
A | 納付が著しく困難であると認められる者に対し、選考のうえ、授業料の全額または半額を免除する制度があります。入学料に関しても同様に、全額または半額を免除する制度があります。

Q | 奨学金の制度はありますか。
A | 様々な奨学金制度があります。詳しくは東京藝術大学ウェブサイト内の「奨学金」の欄を確認してください。

Q | 先端芸術表現科以外の大学施設の利用は可能ですか。
A | 本学には、付属図書館、大学美術館、写真センター、芸術情報センターなどの教育研究施設があり利用可能です。

Q | どのような資格が取得できますか。
A | 教育職員免許状、学芸員資格が取得可能です。

Q | 学園祭のようなものはありますか。
A | 東京藝術大学祭「藝祭」、五芸術大学体育・文化交歓会「五芸祭」などの年間行事があります。

《こんにちは》2013年 / 木材、PEテープ、その他

中村奈緒子 Naoko Nakamura

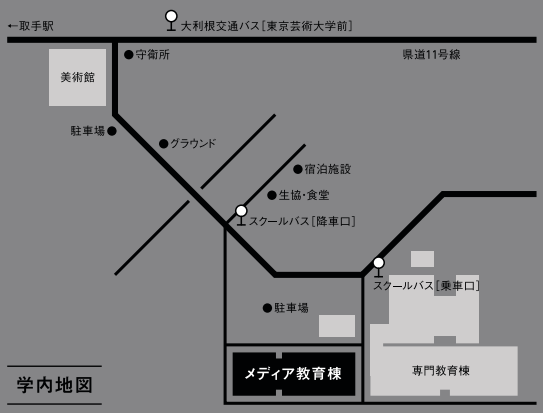
1983年兵庫生まれ。2015年東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻修了。現在、同科大学院博士後期課程在籍。工芸的、手芸的技法を探りながら、過程への拘泥を拠り所に制作を行っている。サロン・ド・プランタン賞、杜の会賞受賞。主な活動に、「Alter space ー変化する、仮設のアート・スペース」アサヒ・アートスクエア（東京）などがある。

—

表紙掲載作品｜《疱瘡のあと、痒さのあまり》中村奈緒子
2014年 / インスタレーション / 金属、木材、その他

©2014 Naoko Nakamura All Rights Reserved. Cover Photo: Kiichi Kawamura

広域地図



学内地図

東京藝術大学美術学部 先端芸術表現科
東京藝術大学大学院美術研究科 先端芸術表現専攻
〒302-0001 茨城県取手市小文間5000 メディア教育棟
http://ima.fa.geidai.ac.jp/

交通アクセス

［電車＋バス］JR常磐線「取手駅」東口から大利根交通バス「東京芸術大学前」、またはスクールバスで約15分。［車］常磐自動車道「谷和原 I.C」から車で約45分。

東京藝術大学

東京藝術大学美術学部 先端芸術表現科／東京藝術大学大学院美術研究科 先端芸術表現専攻
編集・発行：東京藝術大学美術学部 先端芸術表現科／東京藝術大学大学院美術研究科 先端芸術表現専攻
※本パンフレットに掲載の情報は2015年6月1日現在のものです。図版および文章の無断転載・複製を禁じます。 Japan